

碧窗晝寂幽意長 竹陰滿地琴尊涼

輕雷送雨遠不到 雪白水花生晚香

【読み】

碧窓  
昼寂(しづか)にして  
幽意  
長し  
竹陰  
地に満ちて  
琴尊(きんそん)  
涼し  
輕雷  
雨を送り

て  
遠く到らず  
雪白の水花  
晚香  
生ず

【意味】

青い窓辺の書斎は、昼間でありながら静まり返つており、ひつそりとした趣が長く心に染み入つてくる。竹の葉陰が庭いっぱいに広がり、琴と酒器の涼しさが心地よい。**遠くで雷が鳴り、雨雲を連れてきているが、ここまでまだ届かない。**雪のように白い水辺の花が、夕暮れの香りをほのかに漂わせている。

\*碧窓…青い窓。涼しげな書斎の窓辺。

\*幽意…もの静かで深い情趣

\*琴尊…琴と酒（尊）

\*晚香…夕方の芳香

【出典】水軒夏日（馬臻・元）

水軒（すいけん）の夏日　『水辺のあづまやで過ごす夏の日』

この詩は、夏の午後の静かなひとときを詠んだもので、自然の風景と室内の風雅な暮らしが静謐に描かれています。